

現代英語の同格構造に関する意味論ノート —言語要素の並置と「同格性」をめぐって—

高橋 玄一郎

キーワード：同格構造、同格性、意味上の同一・包含関係、英語教育

要旨

いわゆる同格構造の典型的な形式は、意味上の同一性・類似性のもとで同格をなす言語要素 A, B を並置するものである (cf. Crystal 2008: 31)。すなわち一般的には、 $\langle A, B \rangle$ という形式で示せるが、それに類する多岐にわたる言語事象に対して、現代英語のいわゆる同格という概念は、文法家の間でも統一見解が定まっていないことが指摘されている (cf. Quirk et al. 1972: 621)。そうしたなかで、本稿は、非典型的な同格構造を扱い、「同格性」という概念のもとで、学術英語に係る大学英語入門教材にみられる具体的な非典型的同格表現を考察する。その同格構造の特徴は、同格構造 $\langle A, B \rangle$ の A に相当する要素が節 (つまり文) を形成しており、同格の第 2 要素に相当する B の主名詞が、制限的關係節によって修飾されている同格構造であるという点である (e.g. Female smoking rates in these countries have been low historically, a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness (Huntley & Shidara 2006: 50))。

上記例示の文中で、文頭からカンマまでの節が A に相当し、カンマ以後の B に相当する最初が主名詞 *a fact* であり、それを関係詞 *that* 以下の制限的關係節が修飾する構造となっている。この考察を行う上で、同格構造の性質を意味的、統語的観点から段階的に程度差を設けて把握しようとする知見 (Meyer 2011) を援用する。そうすることにより便宜上、数値化を図り、同格構造の典型性を把握する目安を得ることができる。さらに、問題となる同格構造の類例も考察対象に据える。このような同格構造のふるまいに関する考察は、英語教育や学習にも資するものと思われる。

0. はじめに

学生と英文テキストを読み進めていく中で、部分的に読みにくい箇所、つまり、部分的な意味の連結が、自然な形で全体の意味につながり、頭の中に滑らかに入ってくるのに、英文に出くわすことがある。

例えば、“Tobacco companies target traditional women” と題する短いオンライン記事からの、次のような一節である：

... (1) As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets in developing nations, especially in Asia. (2) Female smoking rates in these countries have been low historically, a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness. (3) In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking, with the message, “Do I look like I would cook you breakfast?” ...

(Huntley & Shidara 2006: 50；文中の括弧付き数字は引用者による)

[解釈例：先進諸国での喫煙が減少するにつれて、たばこ会社は新しい市場を発展途上国、特にアジア諸国に、目を向け始めている。女性の喫煙率は、これまで歴史的に低かったという事実があるが、その点を市場開拓者たちが広告を用いてこれから変えていきたいと考えている—その広告は、喫煙することで、ジェンダー平等や健康、ならびに流行に敏感であることが伝えられると暗示している。たとえば、南アフリカの或る広告には「私は家族の朝食を（健気に）作る家庭中心の女性に見えるかしら？」（私は男性と同等に仕事をしているのです）というコピーとともに、たばこを燻らす金髪女性が出ている]

初見で、ある種の違和感を覚えるのは、上記 (2) の英文である。よく見ると、上記 (2) の文中のカンマまでの節（主語と動詞から成る構造体；便宜上、文と呼んでもよい）の内容をカンマ直後の *a fact* が承けて、そこを基点として追加の情報を展開させているのが見えてくる。つまり、(2) の全体は、カンマの前後で、文と名詞が同格関係にあると考えられる。後にも触れるように、典型的な名詞（句）を並列させることで生まれる同格ではない同格もあるという点を押さえておく必要がある。

同格表現の典型を模式的に示せば、おそらく、 $\langle A, B \rangle$ となるであろう（ここでは、A と B は、それぞれ、一定の意味のかたまりを有する言語要素と考える）。すなわち、A という言語要素と B という言語要素が並置されている表現と考えられる。(2) の場合、カンマの前半部を A（第一要素）と考え、カンマ後半部を B（第二要素）と考えて、同格の視点で再確認しておこう（視覚的に両者を区別しやすくするために、便宜上、同格表現の模式にある A に相当する第一要素の言語情報に角括弧を施し、B に相当する第二要素の言語情報に下線を付す；なお第二要素の主名詞を太字で示す；以下、同様）：

(2) … [Female smoking rates in these countries have been low historically], a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness. … [角括弧の節 (A) と下線部の名詞句 (B) が同格関係にあり、節が名詞句に先行]

この同格表現 (2) の第二要素の一部である *a fact* には、関係代名詞 *that* に導かれる形容詞節 (*that* から *trendiness* まで) が伴われている。*a fact that* という語句の並びだけをみれば、同格表現でも頻用されるコロケーションであるが、この文脈での *that* は、直前の *fact* を先行詞とし、動詞 *change* の目的語に相当する「目的格」の役目を果たす関係代名詞である。直前にある *fact* の内容を後部で具体的に承ける導入語となる同格の接続詞 *that* ではない。

1. 同格構造の概念と同格性

大前提として、同格の定義が問題となるが、たとえば、学校文法の参考文献のひとつでもある江川 (1991: 23-24) によれば、同格を次のように規定し、三種の同格を挙げている：

規定：名詞（相当語句）を他の名詞（相当語句）と並べて説明を加えるとき、その二つの名詞が互いに同格（Apposition）の関係にあるという。

3種の同格として、以下の区別をしている (ibid.; 各括弧と太字は引用者による)。

- a. 名詞と名詞 (e.g. [The color] white is a symbol of purity. 白は純潔の象徴)
- b. 名詞と名詞節 (e.g. [The fact] that her fever is going down is [a hopeful sign] that she

is getting better. 彼女の熱が下がっているのは、回復の嬉しい予兆だ)

- c. 文と名詞¹ (e.g. [The summer continued hot and dry], a condition which gave rise to the danger of forest fires. 高温、乾燥の夏が続き、森林火災の危険性が高まった)

前節の (2) の文は、江川 (1991: 23) に従えば、上記 c (文と名詞による同格) に類別される (文が *Female smoking rates* から *historically* までであり、名詞が *fact*)。ここで特徴的と思われるのは、同格の第二要素の主名詞 *fact* が、制限的關係節によって修飾されている同格構造であるという点である。この点については、追って、さらに考察を深めたい。

また、上記 c (文と名詞による同格) で江川 (1991: 24) が指摘している「名詞が先行する場合がある」という例は、冒頭の一節にある英文 (3) に見られる：

- (3) In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking, with [the message], “Do I look like I would cook you breakfast?” [名詞と文が同格関係にある]

このように、いわゆる同格といわれるところの概念は広く、必ずしも一定の認識が文法家の間で共有されているわけではない (cf. Quirk et al. 1972: 621)。しかし、江川 (1991) 以外の文献をみても、同格構造の捉え方が、やはり、広くとられており、冒頭の一節における (1) のように、*especially* という副詞を間に挟み込むことによって、指示対象物を特化する情報伝達方法であっても、文脈上、同格構造であるとみなすものも少なくない。

同格構造の捉え方をこのように広くとるならば、冒頭の一節に示された英文の (1) は同格構造を有するといえる。当該の言語要素間に一定の意味の関連性 (この場合は、意味の焦点化；広くとらえれば意味の包含関係) を有するからである：

- (1) As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets in [developing nations], especially in Asia.

このように、同格構造の第一要素として、発展途上諸国に言及したうえで、その中でも、アメリカや中南米地域ではなく、アジア地域において、という具合に焦点を絞って特定化する機能を有する同格は、*particularization* と名付けられている (Meyer 2011: 76-77; Quirk et al. 1972: 637-638; Quirk et al. 1985: 1316)。この *particularization* タイプの同格を Quirk et al. (1985: 1308) は、幅のある同格概念のうち、典型的ではない同格として位置付けている²。

では、典型的な同格構造と周辺的な同格構造は、どのような基準で把握できるのであろうか。Quirk et al. (1985) を踏まえつつも、さらなる改善を加えた Meyer (2011) は、同格という言語事象に対して、統語的、意味的な考察を行ったうえで以下のような基準を立て、具体の用例を示している (pp. 130-133)：

¹ 江川 (1991) は、文が先行する場合と名詞が先行する場合があることを指摘して、名詞が文に先行する例として、以下の用例を挙げている (江川 1991: 24)：

I find [only one thing] wrong with Carl: he isn't very generous. (カールには一点、問題点があり、それは、あまり気前がよくないことであった。)

² 典型的な同格と典型的ではない同格をスケール概念でとらえている。詳論は Quirk et al. (1985: 1308-1316) を参照されたい。なお、この *particularization* という同格タイプは、別の *exemplification* と呼ばれる、もう一つの非典型的な同格構造 (*for example* 等の例示を表す表現によって同格構造の第 1 要素と第 2 要素の関係を示す同格) と併せて、*Inclusion* の同格と考えられている。これは、基本的な語彙の意味関係を構成するものの一つであり、詳しくは Cruse (1986: 86-88) を参照されたい。

▶ 意味範疇に基づく基準（要素間の意味の同一関係性 congruence relation）³：

下記の3つの基準は、同格構造の要素間の意味の同一関係性 congruence relation を示すものである。同一関係性が高いほど、同格性は高いと考えられ、下記の基準は、その同格性が高い順序で記されている。評価の便宜上、1から3の番号そのものを評価の点数とし、点数が小さいほど同格性が高いと判断する。

1. The units are semantically identical（同格構造の両要素が意味上、同一である）
2. The units are semantically semi-identical（両要素が意味上、ほぼ同一である）
3. One unit is semantically included in the other unit（一方の要素が意味上、他方の要素に含まれている）

▶ 統語範疇に基づく基準（要素間の統語的な依存度）：

要素間の統語的な依存度が高いと、いずれか一方の要素を削除した場合、非文となるが、依存度が低ければ、いずれか一方の要素を削除しても、非文とはならない。つまり、要素間の統語的な独立性が高ければ、同格性は高いと考える。

下記の3つの基準は、同格構造の構成要素がそれぞれ独立しているかどうかを見るものである。第1要素と第2要素それぞれを削除できるかどうか、また、第1要素と第2要素の位置関係を交換できるかどうか、というものである。どちらかを削除しても、両者の位置関係を交換しても、文として問題がなければ、同格性は高いと考える。なんらかの問題があれば、同格性は低いと考える。評価の便宜上、下記の統語的な基準を満たさない観点がいくつあるのかを見て、その数が少ないほど同格性が高いと判断する。

1. The first unit can be deleted（同格構造の第1要素を削除できる）
2. The second unit can be deleted（第2要素を削除できる）
3. The units can be interchanged（第1要素と第2要素を交換できる）

これらの基準の合計点により点数化を行う。以下、Meyer（2011）の判断に基づき同格性の高いものから例示してみよう（Meyerが同格性の判定基準とともに挙げた用例にはMeyer自身の同格性評価が下されているが、判断の過程に係る記述は見られないため、適宜、必要に応じ推察を交えて記す）：

1. [The leader of the group], John Smith, resigned.

（意味範疇は、両要素間の意味関係が同一指示であることから、意味範疇1となる；統語基準は、John Smith resigned / The leader of the group resigned / John Smith, the leader of the group resigned がすべて成り立ち、三つの統語基準をすべて満たすとみられるため、「基準を満たさない」観点の総数は0である。意味範疇の番号1をそのまま点数とみなし、その1点と統語基準からの点数0点を合計して計1点とする；以下同様の方法で同格性の評価を行う）

³ 詳論はMeyer（2022: 89-91）を参照されたい。同格構造の意味範疇に係る基準の1はcongruence relation of identityとしてcoreference（同一指示）とsynonymy（同義性）が相当する。2はcongruence relation of semi-identityとしてcataphoric reference（後方照応的指示）、3はcongruence relation of inclusionとしてattribution（名詞句等による指示的ではなく属性的な用法）とhyponymy（意味の上下関係）とpart/whole relations（部分-全体関係）という意味論上の概念に対応させている。

2. [The writer] Martin Amis is becoming famous.

(意味範疇は、両要素間の意味関係が同一指示であるとみて意味範疇 1。統語基準は、Martin Amis is becoming famous / The writer is becoming famous は可であるが、Martin Amis the writer is becoming famous の判断は半可 (questionable) とみて、統語基準を満たさない観点の総数は 0.5 である。よって、意味範疇 1 点 + 統語範疇 0.5 点 = 1.5 点)

3. [The word] ain't is common in colloquial English.

(意味範疇は、両要素間の意味関係が同一指示であるとみて意味範疇 1。統語基準は、Ain't is common in colloquial English / The word is common in colloquial English は可であるが、Ain't the word is common in colloquial English は不可と判断し、統語基準を満たさない観点の総数は 1 である。よって、意味範疇 1 点 + 統語範疇 1 点 = 2 点)

4. [The belief] that teachers are underpaid is widespread.

(意味範疇は、両要素間の意味関係が指示関係にありながらも、同一 (coreference or synonymy) ではなく、両要素間の意味の包含関係 (attribution or hyponymy or part/whole relation) にあるとも言え切れず、*the belief* がその直後の *that* 節を後方照応的に指示している (cataphoric reference) と Meyer が判断するとみて、意味範疇 2。統語基準は、That teachers are underpaid is widespread / The belief is widespread は可であるが、That teachers are underpaid the belief is widespread は不可と判断し、統語基準を満たさない観点の総数は 1 である。よって、意味範疇 2 点 + 統語範疇 1 点 = 3 点)

5. [The worker's request] to leave early was denied.

(意味範疇は、両要素間の意味関係が同一関係にあるとも包含関係にあるとも言えないと Meyer が判断したものと推察し、意味範疇 2。統語基準は、To leave early was denied は不可 (不定詞による名詞用法が deny の対象になり得ないと推察)、The worker's request was denied は可、To leave early the worker's request was denied は不可とみられることから、統語基準を満たさない観点の総数は 2 である。よって、意味範疇 2 点 + 統語基準 2 点 = 4 点)

6. [Firefighter] Sue Andrews was injured.

(意味範疇は、無冠詞の *firefighter* (社会的役割の強調) が名前の前にカンマなしでついていることから同格構造間の相互依存関係が高く、*firefighter* の集合体の一員として Sue Andrews という人物を捉えるという Meyer の判断 (包含の意味関係) を推察し、意味範疇 3。統語基準は、Sue Andrews was injured は可であるが、Firefighter was injured は不可。Sue Andrews Firefighter was injured の判断は半可 (と Meyer の判断を推察)、であることから、統語基準を満たさない観点の総数は 1.5 である。よって、意味範疇 3 点 + 統語基準 1.5 点 = 4.5 点)

7. [Ed Jones], former mayor of Austin, plans to re-enter politics.

(意味範疇は、両要素間の意味関係が包含関係 (Austin の前市長の一人である Ed Jones) にあると考え、意味範疇 3。統語基準は、Former mayor of Austin plans to re-enter politics は不可。Ed Jones plans to re-enter politics は可。Former mayor of Austin, Ed Jones, plans to re-enter politics は不可、であるとみられることから、統語基準を満たさない観点の総数は 2 である。よって、意味範疇 3 点 + 統語基準 2 点 = 5 点)

8. [A person] like Fran should not exercise too vigorously.

(意味範疇は、両要素間の意味関係が、個性を持った人という存在 (i.e. *a person*) と具体的な個人 (i.e. *Fran*) が上下関係 (hyponymy) にあり、一方が他方の例示ともなっており、広く包含関係にあると Meyer が推察したと判断し、意味範疇 3。統語基準は、Like Fran should not exercise too vigorously / A person like should not exercise too vigorously / Fran like a person should not exercise too vigorously は、いずれも不可であることから、統語基準を見たさない観点の総数は 3 である。よって、意味範疇 3 点 + 統語基準 3 点 = 6 点)

Meyer (2011) の判定基準に基づく、これら直近の 8 つの英文は「同格らしさ」を示す 8 段階の同格性を有しているということになろう。

これらの同格構造に係る同格性の判定に用いた意味範疇と統語基準を援用して、冒頭の英文の一節を再考してみよう。

(再掲)

(1) As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets [in developing nations], especially in Asia. (2) [Female smoking rates in these countries have been low historically], a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness. (3) In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking, with [the message], “Do I look like I would cook you breakfast?”

(Huntley & Shidara 2006: 50; 文中の括弧、下線、太字は引用者による)

上記英文 (再掲) にみられる 3 種の同格構造について、以下、Meyer (2011) の枠組みを用いて順に考察してみよう。

まず (1) に見られる同格構造である。

(1) As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets [in developing nations], especially in Asia.

(1) の同格構造に見られる意味範疇は、両要素間の意味関係が、発展途上国を世界地域の観点からアジアへ焦点化する形で示されているため、「全体－部分の関係」と捉えられよう。つまり、意味の包含関係とみられるため、Meyer の意味範疇は、基準 3 (One unit is semantically included in the other unit) に相当する。統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

(1a) As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets, especially in Asia.

(1b) As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets in developing nations.

(1c) ?As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets, especially in Asia in developing nations.

(1c) は焦点化の方向が本来の英文 (1) と逆になり通常の文脈では違和感を覚えるが、表現効果上、語用論的に可となりうることを考慮し、統語基準を満たさない観点の数を 0.5 とする。よって、

意味範疇3点+統語基準0.5点=4.5点となる。

次に、(2)にみられる同格構造を考察してみよう。

(2) [Female smoking rates in these countries have been low historically], a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness.

(2)の同格構造に見られる意味範疇は、同格構造の第2要素にある *a fact* が、第1要素の [] 内にある節全体と対応するとみられることから、両要素間の意味関係は、第2要素の冒頭の *a fact* が第1要素の趣旨を承け負い、それを土台として新規情動的な議論を進展させていると考えられる。この両要素間の関係は、包含関係 (congruence relation of inclusion) にあると判断できるのではないか。そうであれば、先の Meyer の意味範疇3に相当すると思われる。

他方、統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

(2a) ??A fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness.

(2b) Female smoking rates in these countries have been low historically.

(2c) ??A fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness, [female smoking rates in these countries have been low historically].

(2a) は、本来の原文 (2) から同格構造の第1要素を削除し、第2要素が残った形であるが、全体として、関係代名詞 *that* 以下の関係節が主名詞 *fact* を修飾する名詞句である。(2b) は、第2要素を削除し、第1要素が残った形であるが、全体として、単文の構成となる。(2c) は、第1要素と第2要素の位置を交代させた文である。(2a) と (2c) が統語上不適格と判断し、統語基準を見たさない観点の総数は2である。よって、意味範疇3点+統語基準2点=5点となる。

最後に、(3)に見られる同格構造を考察してみよう。

(3) In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking, with [the message], “Do I look like I would cook you breakfast?”

(3)の同格構造に見られる意味範疇は、両要素間の意味関係が、同一指示であるとみて意味範疇1 (The units are semantically identical) と考えられる。統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

(3a) ??In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking with “Do I look like I would cook you breakfast?”

(3b) In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking with the message.

(3c) ??In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking, with “Do I look like I would cook you breakfast?,” the message.

(3a) は、本来の原文 (3) から同格構造の第1要素を削除し、第2要素が残った形だが、全体として、節 (すなわち文) を維持するものの、前置詞 *with* の目的語に引用符付きの疑問文が充て

られている。(3b) は、第2要素を削除し、第1要素が残った形であるが、全体として、単文の構成となる。(3c) は、第1要素と第2要素の位置を交代させた文であるが、文末の *the message* が宙に浮いた状態となっている。(3a) と (3c) を統語上不適格と判断する。(3b) を統語上の不安定性から異議ありとする見方もあるかもしれないが(3a) や (3c) と相対的にみて可とした。このことから統語基準を見たさない観点の総数は2である。よって、意味範疇1点+統語基準2点=3点となる。

以上、0節の冒頭で取り上げた英文の同格構造について、Meyerによる同格性判定基準に基づき、3つの文の同格性を判定した。意味範疇と統語基準に基づく合計点は、小さいほど、同格性が高いと判断されるため、3つの英文を同格性の高い順に並べると、以下のような結果となる：

▶ (3点：相対的にみて、中心的な同格性)

(3) In South Africa, for instance, one ad shows a blonde smoking, with [the message], “Do I look like I would cook you breakfast?”

▶ (4.5点：相対的に見て、やや周辺的な同格性)

(1) As smoking in the developed world declines, tobacco companies are starting to concentrate on new markets [in developing nations], especially in Asia.

▶ (5点：相対的にみて、周辺的な同格性)

(2) [Female smoking rates in these countries have been low historically], a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness.

英文解釈上、最も違和感の感じられた、同格構造の一種と思われた英文(上記英文(2)が、Meyer(2011)の基準に照らしても相対的に最も同格構造らしくないということとなる。その違和感なるものは、構造上、同格の第二要素において主となる名詞が、制限的關係節によって修飾されているところから生じていたと考えられる。

ある意味のかたまりである二つの情報を、*apposition*という言葉の原義通りに、並置することは、いわば単純な言語操作であろう。双方の意味に関連性が互いにあると思われるからこそ、表現者はそのような表現を行う。その意味の関連は、基本、Meyer(2011)の指摘にもある通り、Cruse(1986: 87)の提示する語義間の4種の意味関係(identity, inclusion, overlap, disjunction)⁴でとらえることができる。

また、統語面からいえば、同格構造をなす第1要素と第2要素が、それぞれ独立した言語要素であるかどうかを確かめるため、第1要素と第2要素おののおのを削除できるかどうかを確かめることで同格構造の同格性を判定することが可能である。さらに、第1要素と第2要素を相互交換したときの容認性を確かめることによっても、同格構造の同格性を判定することが可能である。ここでは同格を有するとされる言語事象にみられる性質を「同格性」と呼んでいるが、その同格

⁴ Cruse(1986: 86-87)は基本的語彙関係を集合的に congruence relations と呼び、4種の意味的關係を次のように説明している：1. Identity: class A and class B have the same members; 2. Inclusion: class B is wholly included in class A; 3. Overlap: class A and class B have members in common but each has members not found in the other; 4. Disjunction: class A and class B have no members in common.

性の中心をとらえつつ、その周辺の言語事象をも射程に入れて、教育や学習に資する方向で考察できる備えをしておくことは無益ではなからう。

併せて、並置されている言語要素間にある意味の関連性を、文脈、場面、状況に応じて受け手側が推察、洞察しなければならない。文字通りの意味に注目すると同時に、書かれていない部分を推察する必要のある意味に注目しなければならない。そこには、同格表現による並置された意味の関連性が相手に対してどの程度伝えられているか、という表現する側の問題と、並置された意味の関連性をどの程度、解釈できているのか、という解釈を行う受け手側の問題がある。それはいずれも、同格表現の意味機能に係る動的な側面といえよう。

以下、冒頭の一節にみられた、初見で違和感を覚えた同格構造を中心に、類例も加えながら、さらに考察を加えてみよう。

2. 同格の第二要素の主名詞が、制限的關係節によって修飾されている同格構造－再考－

冒頭で紹介した英文を再掲する：

[Female smoking rates in these countries have been low historically], a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness.

ここで、原文の同格構造の第2要素に見られる *a fact* は、統語構造上、直後の関係代名詞 *that* (目的格) を介して *change* の目的語となっていると考えられるが、そもそも *change a fact* は、どのような事態を表すのであろうか。特定の文脈をはずして、*a fact* を、いわゆる「事実」と解釈すると、日本語でいうところの「事実を変える」という認識のあり方には違和感が生じるように思われるが、英語のコロケーション上は多少の頻度の差があるものの⁵、*change* の目的語に *fact* あるいは *situation* を取ることに問題はない (cf. BNC)。変化を加えることの可能な *fact* というものは、状況 (*situation*) に近いのではないかと思われる。そのような見通しのもとで、*fact* と *situation* の語義を英英辞典で見てみる：

- ・ *fact*: something which is known to have happened or to exist, esp. something for which proof exists, or about which there is information⁶ (*CIDE*)

[起こった (生じた)、あるいは、存在すると分かっている何か、とりわけ、その証拠がある場合、もしくは、その情報がある場合の何か]

- ・ *situation*: The situation (=what is happening) is making her very unhappy.

[その状況 (= 現在、起きていること) が彼女を大変悲しませている]

“Would you get involved in a fight?” “It would depend on the situation(=the particular conditions). [他、省略] (Ibid.; 他記載文例・語義省略)

[[喧嘩をする気か?] - 「状況 (= 特定の諸状況・状態) 次第だ]]

“I’ll worry about it if/when/as the situation arises (=if/when/as it happens).

⁵ BNCによれば、少なくとも“... change the fact ...”のコロケーションが6例、change the situationのコロケーションが23例確認できる。ここでは目的語としての名詞と動詞のコロケーションをみているため、定冠詞 *the* と不定冠詞 *a/an* の使用上の区別は問題としない。

⁶ 期せずして、この語義表記の表現構造は同格の体を成している。表記の後半部で、*esp.*(=*especially*) を用いることで、particularization が図られ、意味の焦点の絞り込みが行われている。Meyer (2011) の同格性をみる意味範疇によれば、congruent relation of inclusion として理解されうる。

英英辞典 *CIDE* の場合、これら両語の語義記載方法がことなるが、*fact* は、ある出来事や存在物の状態が安定的に完了した結果の状況を中心的にとらえるといつてよいように思われる。他方、*situation* は、ある出来事の結果よりも進行中の流動的な経過や状況・状態に焦点があたるものとみられる。

このような考察は、0 節冒頭の英文にみられる同格構造の第 1 要素（節 = 文）にあたる「歴史的に見て当該諸国における女性の喫煙率がこれまで低いままである」という内容に対する同格表現として、第 2 要素に *fact* が用いられることは必ずしも不自然ではないという確認になると思われる⁷。

2.1 類例の検討

幾つかの他の類例を検討しておこう。検討の際には、先に用いた Meyer (2011) の判定基準を援用する（再掲；意味関係上の註の追記）：

▶ 意味範疇に基づく基準（要素間の意味の同一関係性 congruence relation）：

1. The units are semantically identical（同格構造の両要素が意味上、同一である cf. coreference, synonymy）
2. The units are semantically semi-identical（両要素が意味上、ほぼ同一である cf. cataphoric reference）
3. One unit is semantically included in the other unit（一方の要素が意味上、他方の要素に含まれている cf. attribution, hyponymy, part/whole relation）

▶ 統語範疇に基づく基準（要素間の統語的な依存度）：

1. The first unit can be deleted（同格構造の第 1 要素を削除できる）
2. The second unit can be deleted（第 2 要素を削除できる）
3. The units can be interchanged（第 1 要素と第 2 要素を交換できる）

まず、同格構造の第 2 要素に “a fact that…” を用いる類例である：

- (1) [Buying and selling art is at its most dramatic in an auction], a fact that auction houses are quick to exploit. In the past three decades there has been considerable success for auctioneering, both in terms of money and also in prestige.

(BNC (A04 (文番号 1066) : Art criticism: a user's guide (1991)

(解釈例：芸術作品の売買は、競売をするときに最も劇的な様相を呈する—それは、競売会社が利益を見込んで素早く利用する状況である。過去 30 年間、競売はお金と名声の両面でかなりの成功を収めてきた)

⁷ 仮に、*fact* の代わりに *situation* を用いる可能性については、*CIDE* の具体文中の語義例 (situation=what is happening) の類推から、*situation* が *what was happening* (起こりつつあったこと) や *what has been happening* (すでに起こっていること；場合によっては今後も起こり続けるであろうこと) を意味する場合も可と考えられることから、ありうるであろう。しかし、安定した結果の状況というよりも途中経過の状況を示す部分に焦点がおかれるものと考えられよう。

上記 (1) の同格構造に見られる意味範疇は、同格構造の第 2 要素にある *a fact* が、第 1 要素の [] 内にある節全体と対応するとみられることから、両要素間の意味関係は、第 2 要素の冒頭の *a fact* が第 1 要素の趣旨（芸術品のオークションが劇的であること）を承け負い、それを土台として新規情動的に付加的情報を展開させているものと考えられる。この両要素間の関係は、Meyer (2011: 90, 132) の意味範疇上、包含関係 (congruence relation of inclusion) にあると判断できよう。そうであれば、先の Meyer の意味範疇 3 に相当すると考えられる。

他方、統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

(1a) ??A fact that auction houses are quick to exploit.

(1b) [Buying and selling art is at its most dramatic in an auction].

(1c) ??A fact that auction houses are quick to exploit, buying and selling art is at its most dramatic in an auction.

英文の容認可能性として、基準 2 からみて (1b) は可であるが、基準 1 と 3 からみて (1a) と (1c) は不可となる。よって、統語基準を見たさない観点の総数は 2 である。これらから、同格性の判断は、意味範疇 3 点 + 統語基準 2 点 = 5 点となる。典型的な同格構造ではないことが数値化で示せることとなる。

次に、小説の文体にみられる類例 (2) を考察してみよう。

(2) The group strode over to our table in a menacing way, and the Venezuelan growled:

Why are you always together?

What are you doing?

Why is he here?

He does not belong to this college!

I replied that [we were studying and writing], a fact that was obvious from the books, dictionaries and papers scattered over the table and the bed.

With sulky faces, the students turned to go.]

(BNC: AC6 (文番号 598) : A poet could not but be gay (1991)

(同格箇所解釈例：私たちは書きながら勉強していたのだと返答した—それは、本や辞書や紙といったものがテーブルやベッドの上に散乱していたことから明らかであった)

上記 (2) の同格構造に見られる意味範疇は、(1) の考察同様に、同格構造の第 2 要素にある *a fact* が、第 1 要素の [] 内にある節全体と対応するとみられることから、両要素間の意味関係は、第 2 要素の冒頭の *a fact* が第 1 要素の趣旨を承け負い、それを土台として新規情動的に、第 1 要素の内容（私たちが書きものの勉強をしていたこと）が fact である根拠を示す説明が展開されていると考えられる。この両要素間の関係は、Meyer (2011: 90, 132) の意味範疇上、包含関係 (congruence relation of inclusion) にあると判断できよう。そうであれば、先の Meyer の意味範疇 3 に相当すると考えられる。

他方、統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

(2a) ??I replied that a fact that was obvious from the books, dictionaries and papers scattered over the table and the bed.

(2b) I replied that [we were studying and writing].

(2c) ??I replied that a fact that was obvious from the books, dictionaries and papers scattered over the table and the bed, [we were studying and writing].

英文の容認可能性として、基準 2 からみて (1b) は可であるが、基準 1 と 3 からみて (1a) と (1c) は不可となる。よって、統語基準を見たさない観点の総数は 2 である。これらから、同格性の判断は、意味範疇 3 点 + 統語基準 2 点 = 5 点となる。典型的な同格構造ではないことが数値化で示せることとなる。

これら (1) と (2) の同格構造に見られる同格性は、いずれも Meyer (2011) の同格性の基準に照らして、典型的な同格構造と比較して低いといえる。

さらに同様の同格構造を有すると考えられる新聞記事からの用例を 3 件⁸、観察しておこう。同格の第二要素の主名詞が、制限的關係節によって修飾されている同格構造という点で先の類例と変わりはないが、*fact* という名詞の代わりに、*lie* (虚言) や *privilege* (権利) や *milestone* (道標) といった、当該文脈上、類義的な名詞が使われている点が異なる。まずその一つである、次の用例 (3) を見てみよう：

(3) Hours after the United States voted, [the president declared the election a fraud] — a lie that unleashed a movement that would shatter democratic norms and upend the peaceful transfer of power.

(霜崎 2022; *The New York Times* : 77 days: Trump's Campaign to Subvert the Election)
(解釈例：米国選挙の投票終了後、数時間して、大統領は選挙に不正があったと公言した — その発言は虚言であり、民主的な規範を乱し、平和的な権力の移譲を台無しにする騒動を誘発した)

上記 (3) の同格構造に見られる意味範疇は、同格構造の第 2 要素にある *a lie* (虚言) が、第 1 要素の [] 内にある節全体の内容と対応するとみられることから、両要素間の意味関係は、第 2 要素の冒頭の *a lie* が第 1 要素の趣旨 (大統領による不正選挙の公言) を受け負い、それを土台として議論を展開させていると考えられる。この両要素間の関係は、Meyer (2011: 90, 132) の意味範疇上、包含関係 (congruence relation of inclusion) にあると判断できるのではないか。そうであれば、先の Meyer の意味範疇 3 に相当すると考えられる。

他方、統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

(3a) ??Hours after the United States voted, a lie that unleashed a movement that would shatter democratic norms and upend the peaceful transfer of power.

(3b) Hours after the United States voted, [the president declared the election a fraud].

(3c) ??Hours after the United States voted, a lie that unleashed a movement that would shatter democratic norms and upend the peaceful transfer of power, [the president declared the election a fraud].

英文の容認可能性として、基準 2 からみて (3b) は可であるが、基準 1 と 3 からみて (3a) と (3c)

⁸ 日本エドワード・サピア協会第 37 回研究発表会 (2022 年 10 月 22 日) にて霜崎實氏 (慶應義塾大学) より用例のご教示を受けた。

は不可となる。よって、統語基準を見たさない観点の総数は2である。これらから、同格性の判断は、意味範疇3点+統語基準2点=5点となる。これまでと同様に、典型的な同格構造とは言えないことが数値化で示せることとなる。

次の用例(4)も考察してみよう：

- (4) If athletes don't like restrictions imposed on the unvaccinated, [they could just get a shot like millions of other people] — a privilege that millions more are still waiting for. (霜崎 2022; *The New York Times* : Novak Djokovic, Great at Tennis and Bad at Science, Awaits His Fate)

(解釈例：アスリートたちがワクチン接種を受けていない人たちに課される制約が気に入らないのであれば、他の何百万という人々同様に接種を受ければよい—それは、何百万もの人々が(手に入れたいと)待ち望んでいる特権(特別な扱い)に等しい)

上記(4)の同格構造に見られる意味範疇は、同格構造の第2要素にある *a privilege* (特別扱い)が、第1要素の [] 内にある節全体の内容 ([ワクチン未接種者に課される制約をアスリート達が好まないということ] アスリート達のワクチン接種が可能となること) と対応するとみられることから、両要素間の意味関係は、第2要素の冒頭の *a privilege* が第1要素の趣旨を承け負い、それを土台として議論を展開させていると考えられる。この両要素間の関係は、Meyer (2011: 90, 132) の意味範疇上、包含関係 (congruence relation of inclusion) にあると判断できるのではないか。そうであれば、先の Meyer の意味範疇3に相当すると考えられる。

他方、統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

- (4a) ??If athletes don't like restrictions imposed on the unvaccinated, a privilege that millions more are still waiting for.
 (4b) If athletes don't like restrictions imposed on the unvaccinated, [they could just get a shot like millions of other people].
 (4c) ??If athletes don't like restrictions imposed on the unvaccinated, — a privilege that millions more are still waiting for. [they could just get a shot like millions of other people].

英文の容認可能性として、基準2からみて(4b)は可であるが、基準1と3からみて(4a)と(4c)は不可となる。よって、統語基準を見たさない観点の総数は2である。これらから、同格性の判断は、意味範疇3点+統語基準2点=5点となる。これまでと同様に、典型的な同格構造とは言えないことが数値化で示せる。

最後にもう一例を考察しておく：

- (5) [America's gross national debt exceeded \$31 trillion for the first time on Tuesday], a grim financial milestone that arrived just as the nation's long-term fiscal picture has darkened amid rising interest rates.

(霜崎 2022; *The New York Times* : U.S. National Debt Tops \$31 Trillion for First Time)

(解釈例：米国の総負債額が火曜に初めて31兆円を超過した—これは財政上の重大な節目の到来であり、金利が高騰する中で、米国財政の長期見通しに暗雲が垂れ込めている状況だ)

上記 (5) の同格構造に見られる意味範疇は、同格構造の第 2 要素にある *a grim financial milestone* (財政上の重大な節目) が、第 1 要素の [] 内にある節全体の内容 (米国総負債額が 31 兆円の超過) に対応するとみられることから、両要素間の意味関係は、第 2 要素の冒頭の *a grim financial milestone* が第 1 要素の趣旨を承け負い、それを土台としてさらに議論を展開させていると考えられる。この両要素間の関係は、Meyer (2011: 90, 132) の意味範疇上、包含関係 (congruence relation of inclusion) にあると判断できるのではないか。そうであれば、先の Meyer の意味範疇 3 に相当すると考えられる。

他方、統語面では、Meyer の統語基準に照らせば、以下のようになろう：

- (5a) ??A grim financial milestone that arrived just as the nation's long-term fiscal picture has darkened amid rising interest rates.
- (5b) [America's gross national debt exceeded \$ 31 trillion for the first time on Tuesday].
- (5c) ??A grim financial milestone that arrived just as the nation's long-term fiscal picture has darkened amid rising interest rates, [America's gross national debt exceeded \$ 31 trillion for the first time on Tuesday].

英文の容認可能性として、統語基準 2 からみて (5b) は可であるが、統語基準 1 と 3 からみて (5a) と (5c) は不可となる。よって、統語基準を見たさない観点の総数は 2 である。これらから、同格性の判断は、意味範疇 3 点 + 統語基準 2 点 = 5 点となる。これまでと全く同様に、典型的な同格構造とは言えないことが数値化で示せることとなる。

類例の検討として例示した 5 例文は、Meyer (2011) の同格性判定の数値目安によれば、いずれも 5 点をマークし、典型的な同格といえるものではない。しかしながら、同格構造 < A, B > の第一要素 (A) の内容が、第二要素 (B) の主名詞によって承け止められ、そこを基点として前段の根拠が示されたり、付加的情報や、新しい議論が展開されるという共通的な特徴がみてとれる。第一要素の節を独立させ、文として区切ることも可能であろうが、それをせずに、同格性を活用して、第一要素に制限的關係節を伴う第二要素をカンマで継続させる表現方法は、矢継ぎ早の躍動感をもって、読み手、聴き手に対して、たたみかけるようなインパクトを与える効果があるように思われる。

3. おわりに

本稿は、同格構造を < A, B > と模式化したときに、第一要素 A が節を成し、第二要素 B には限定的關係節によって修飾を受ける主名詞が用いられているタイプの同格を考察対象とした。そのような非典型的な同格構造が有する、ある種の複雑さを Meyer (2011) の意味的・統語的な観点に基づく同格性の判定基準を援用して考察し、同格らしからぬ点を数値化する試みをおこなった。それにより、直観的に同格らしからぬ印象をある程度客観的に把握することができたと思われる。

意味範疇の判定や統語基準から見た判定に、語用論的な観点加わることなどで判定の数値に揺れが生じる余地は残るであろうが、そのような点は今後の課題としたい。意味的、統語的な観点に文脈、場面、状況や発信者の意図などを考慮した語用論的な観点を加えることで、当該の同格構造の機能的なふるまいをより適切に把握することとなるように思われる。それは、とりもなおさず、英語表現全体のより良き理解につながるものであろう。

言語表現の同格という概念を同格性という枠組みでとらえ直す見方は、英語教育や英語学習に

も資するものと思われる。そのために、どのような更なる工夫や改善の余地があるかについては、教育現場でのさらなる応用や知見のさらなる拡充なかで吟味していきたい。

参考文献

- Crystal, David. 2008. *A dictionary of linguistics and phonetics*. (6th edition.) Oxford: Blackwell Publishers Ltd.
- 江川 泰一郎. 1991. 『英文法解説 第3版』 東京：金子書房.
- Meyer, C. F. 2011. *Apposition in Contemporary English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 霜崎 實. 2022. 「英語の同格構造を巡って—第2要素が関係節を伴う場合を中心に—」
日本エドワード・サピア協会第37回研究発表会（10月22日；於 東京大学）ハンドアウト.

Text

Huntley, H. & K. Shidara. (2006) *Introduction to Academic Reading*. Tokyo: Cengage Learning.

辞書

Cambridge International Dictionary of English. (Cambridge University Press, 1995) (本文中、CIDE と略記)

The Oxford English Dictionary, 2nd ed. (Oxford University Press, 1991) (本文中、*OED*² と略記)

コーパス

British National Corpus. (本文中、BNC と略記)

Semantic notes on appositive structures in contemporary English

TAKAHASHI Gen-ichiro

Keywords: appositive structures, gradience, semantic identity/inclusion, English education

A prototypical English appositive structure “A, B” is widely known as a useful expression for conveying identical meaning in reference between the two linguistic units A and B, such as “*Taro, my best friend, came here yesterday.*” However, many other peripheral types of apposition are in academic prose, the press and literary works. Attempts have been made in this paper to understand better somewhat complicated linguistic behavior of apposition, which corresponds to a kind of peripheral and non-typical appositive found in academic prose in English education classrooms, such as “...Female smoking rates in these countries have been low historically, a fact that marketers want to change with ads that imply that smoking communicates equality, fitness, and trendiness. ...” (Huntley & Shidara 2006: 50). The actual example above shows us that the first unit of the appositive structure is a clause (i.e., a sentence) and that the second unit is a noun phrase, whose central words are *a fact*, modified by a relative clause. To capture the behavior of such a less central type of apposition, we use the idea of Meyer (2011: 130-133), which categorizes general English appositives in terms of gradience using three semantic categories (or degrees of identity/inclusion in appositives) and three syntactic criteria (or degrees of independence). The idea of gradience helps us better understand the degrees of complicatedness in appositive structures. In conclusion, language learning may be enhanced when considering these aspects of English appositive structures. Further investigation should aim to test the application to English language learning and education.